

平成30年8月3日(金)

夏休み

8月4日から、校長便りは、夏休みに入ります。再開は、8月20日月曜日といたします。

この時期、夕刻になるとどこからともなく、ジャンガラ念仏踊りの調べが熱い風に乗って聞こえてきます。稲田の向こう側からかすんでいく夕焼けの中に、太鼓の音と鐘の音が聞こえてくると、哀愁が時のしじまに漂い始め、遠い幼いときの記憶や、もう亡くなった様々な人々の何気ない立ち居振る舞いや、耳に残る声色と言葉の端々がよみがえって、迎え火の火の勢いの記憶や手ぬぐいについたスイカの赤い汁の記憶と共に、懐かしさに包まれます。

ジャンガラの季節は、部落ごとに若衆達が浴衣装束で手ぬぐいを頭に、襷で袖を束ねて、10軒以上の新盆の家を回って魂を鎮めて参ります。衣装は浴衣、帯、襷、鉢巻、手甲、白足袋をつけ、ぞうりを履いて、三人の太鼓を中心に、10人前後の鉦を打つ者がまわりを囲み、後ずさりに回りながら独特なふりつけに合わせて踊ります。提灯持ちが先導します。このごろはマイクロバスで地域を離れて遠くまで、新盆の家を回って歩くようです。

若衆達も盆の三日間は休むに休まれず、集まった親族の見つめる中、

「ナーハハハイ モーホホホイ ナハハハーハメエー

ハーハーハイ モーホーホイ モーホーサヨー

ソリャナーハイ モーホホホイ ナーハハハーハメエー

盆てば米の飯 おつけてば茄子汁 十六ささぎのよごしはどうだい

いわき平で 見せたいものは 桜ツツジと じゃんがら踊り」

例えば、小名浜や豊間、沼之内、四倉など浜の方では、

「赤井嶽から 七浜見イれば 出船入船 大漁船」

などと10分くらい、踊りを行い、親族達はその踊りを見つめながら、亡き人の昔を思い出すという厳粛なイニシエーションにもなっているのです。

暑い夏が過ぎていく名残を感じながら、深い夜の向こう側をのぞき見る郷土の行事の過ごし方も風情あるものなのです。

盆が過ぎれば秋風も吹く。海は土用波、田の稲にも花が咲く季節。やがて来る秋の実りの時期への心づもりもうかがえ、夏は過ぎていくのです。

井上陽水の「少年時代」が聞こえてくるようです。

夏が過ぎ 風あざみ 誰のあこがれに さまよう

青空に 残された 私の心は 夏模様

夢が覚め 夜の中 永い冬が 窓を閉じて

呼びかけたままで 夢はつまり 思い出のあとさき

夏まつり 宵かがり 胸の高なりに 合わせて

八月は 夢花火 私の心は 夏模様